長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第17集

下羽付（しもはつき）遺跡

主要地方道佐世保日野松浦線道路改良工事
に係る埋蔵文化財発掘調査

２０１６

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書　第17集

下羽付（しもはつき）遺跡

主要地方道佐世保日野松浦線道路改良工事
に係る埋蔵文化財発掘調査

２０１６

長崎県教育委員会

下羽付遺跡調査区遠景（北西から）

下羽付遺跡調査区遠景（北から）

下羽付遺跡調査区遠景（南東から）

第Ⅰ・第Ⅱ調査区調査終了状況

刊行にあたって

本書は、佐世保市世知原町において実施された主要地方道佐世保日野松浦線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書です。

佐世保市世知原町を流れる佐々川とその支流域では、多くの洞窟遺跡が発見されており、日本の考古学史上非常に重要視されてきました。なかでも福井洞窟は、昭和30年代から発掘調査が行われており、旧石器時代から縄文時代への人々の生活の変化の様相を明らかにしうる遺跡として、国の史跡に指定されています。また、この遺跡から約600m南には、松浦党の歴史を語る上で重要な、直谷城跡という中世城郭が存在します。このように歴史的に重要な位置にありながらも、現状ではこの地域は発掘調査の事例が少ない地域です。本書が報告する下羽付遺跡では、縄文時代の黒曜石製の石鏃や磨石、また磨製石斧といった遺物を多数検出し、歴史の解明に資する情報を得ることができました。

発掘調査の実施に当たり、ご理解とご協力をいただきました地元関係者の皆様方に深く感謝申し上げますとともに、調査成果が学術的に広く活用され、さらには地域の方々の郷土を理解する資料として役立てていただければ幸いです。

平成28年3月31日

長崎県教育委員会教育長

池　松　誠　二

例　　言

1　本書は平成27年度主要地方道佐世保日野松浦線道路改良工事に係る埋蔵文化財〔下羽付遺跡〕発掘調査報告書である。

2　下羽付遺跡は佐世保市世知原町矢櫃免に所在する。

3　下羽付遺跡の発掘調査は長崎県埋蔵文化財センターが担当し、発掘調査業務を株式会社大信技術開発に委託した。

調査組織（平成26年度：範囲確認調査）

長崎県埋蔵文化財センター	所長	山本忠敬
	調査課長（当時）	町田利幸
	調査課　文化財調査員	前田加美

調査組織（平成27年度：本調査）

長崎県埋蔵文化財センター	所長	山本忠敬
	調査課長	川道寛
	調査課　文化財保護主事	白石渓冴
	調査課　文化財調査員	前田加美
	調査課　文化財調査員	谷口智亮
株式会社大信技術開発		
	現場代理人	武内龍一
	調査員	大谷伸宏
	調査員	森恵

4　下羽付遺跡の発掘調査期間

①　範囲確認調査：平成27年３月２日～平成27年３月６日

②　本　調　査：平成27年６月29日～平成27年８月14日

5　本調査の準備及び調査期間において、佐世保市教育委員会の協力を得た。

6　本調査の現場記録（写真撮影、実測図作成）、及び遺物の記録は白石渓冴が担当した。

7　本書の第４、８、９、10図の作成には、大谷伸宏（株式会社大信技術開発）の協力を得た。

8　本書に収録した遺物や記録類は、長崎県埋蔵文化財センターで保管している。

9　本書で用いた座標は、世界測地系である。

10　本書で用いた方位は座標北である。

11　本書の中国語要旨の翻訳は王達来（龍谷大学大学院国際文化学研究院博士後期課程）に、韓国語の翻訳は古澤義久（長崎県埋蔵文化財センター 東アジア考古学研究室 主任文化財保護主事）に依頼した。

12　本書の執筆・編集は白石渓冴が行った。

13　本書の第１図の作成には、テクノコ白地図イラスト（http://technocco.jp/）を改変、使用した。

本 文 目 次

Ⅰ　調査に至る経緯……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境
1．地理的環境……2
2．歴史的環境……3

Ⅲ　調査の概要
1．調査の概要……6
2．層位……11
3．遺物の分布状況について……12

Ⅳ　出土遺物
1．第３層出土遺物……16
2．第２層出土遺物……16
3．表土出土遺物……20

Ⅴ　総括……23

挿 図 目 次

第１図　下羽付遺跡位置図……1
第２図　下羽付遺跡周辺遺跡分布図……3
第３図　下羽付遺跡周辺図……6
第４図　下羽付遺跡等高線図（１/300）……7
第５図　下羽付遺跡土層図①（１/60）……8
第６図　下羽付遺跡土層図②（１/60）……9
第７図　下羽付遺跡土層図③（１/60）……10
第８図　下羽付遺跡黒曜石・安山岩分布図（１/150）……13
第９図　下羽付遺跡遺物分布図①（１/100）……14
第10図　下羽付遺跡遺物分布図②（１/100）……15
第11図　第３層、第２層出土石器（２/３）……17
第12図　第２層出土石器（２/３）……18
第13図　第２層出土遺物（２/３、１/２）……19
第14図　表土出土遺物（２/３）……21

表　目　次

第１表　下羽付遺跡周辺遺跡一覧表……4
第２表　第２層、第３層出土遺物観察表……20
第３表　表土出土石器観察表……22

図　版　目　次

巻頭カラー１　上段　下羽付遺跡調査区遠景（北西から）
　　下段　下羽付遺跡調査区遠景（北から）
巻頭カラー２　上段　下羽付遺跡調査区遠景（南東から）
　　下段　第Ⅰ・第Ⅱ調査区調査終了状況

図版１　第Ⅰ調査区調査終了状況・第Ⅱ調査区調査終了状況
図版２　第Ⅰ調査区２層完掘状況①・第Ⅰ調査区２層完掘状況②
図版３　第１トレンチ土層観察・第２トレンチ土層観察
図版４　第３トレンチ土層観察・第３トレンチ拡張状況
図版５　第Ⅱ調査区表土除去後状況・第４トレンチ土層観察
図版６　下羽付遺跡出土遺物①
図版７　下羽付遺跡出土遺物②
図版８　下羽付遺跡出土遺物③
図版９　下羽付遺跡出土遺物④
図版10　下羽付遺跡出土遺物⑤
図版11　下羽付遺跡出土遺物⑥
図版12　下羽付遺跡出土遺物⑦
図版13　下羽付遺跡出土遺物⑧
図版14　下羽付遺跡出土遺物⑨
図版15　下羽付遺跡出土遺物⑩
図版16　下羽付遺跡出土遺物⑪

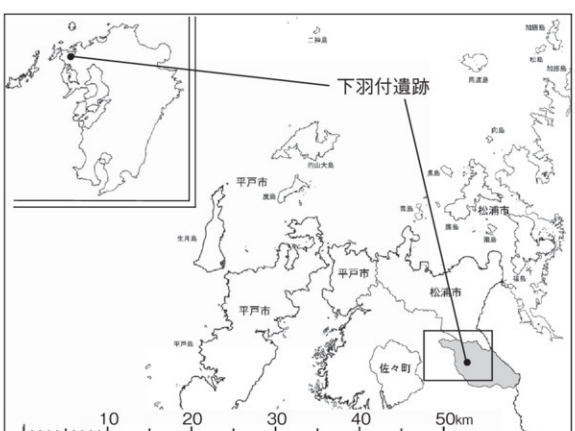
Ⅰ　調査に至る経緯

下羽付遺跡は、佐世保市世知原町の市街地から西方約１km の距離に位置し、北西に向かって緩やかに下る傾斜地の東西約120m、南北約200m、標高180～200m の範囲に広がる縄文時代の遺物包含地である。

長崎県県北振興局道路建設課による臨時県道整備事業（主要地方道佐世保日野松浦線）は、佐世保市から松浦市までを結ぶ一般県道佐世保日野松浦線について、幅員が狭く線形が悪い箇所を改良し円滑な通行と安全性を確保する目的で実施されている道路改良工事である。このうち長田代工区については、平成24年度に県道路建設課から事業計画が提出された。工事延長800m のうち約150m が、下羽付遺跡の東側外周部分に沿うように計画されていたことから、同年７月に佐世保市教育委員会が分布調査を実施し、工事に際し事前に範囲確認調査が必要であると判断された。

その後、平成26年度に用地買収等調査に入る要件が整ったため、平成27年３月２日から平成27年３月６日にかけて長崎県埋蔵文化財センターが範囲確認調査を実施した。遺跡内での工事予定地は長さ約150m、最大幅約12m の三日月状の形状をした範囲であり、この中に４箇所の試掘坑を設定し、範囲確認調査を行った。その結果、工事予定範囲の南端に設定した試掘坑を除く、３箇所の試掘坑において遺物包含層を確認した。

範囲確認調査の結果を受けて、平成27年３月に県道路建設課と県学芸文化課、県埋蔵文化財センターで協議を行い、本調査による記録保存を行う方針が決定された。本調査は平成27年６月29日から平成27年８月14日にかけて実施した。



第１図　下羽付遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．地理的環境

下羽付遺跡が所在する佐世保市世知原町は長崎県北部の山間にあり北松浦半島に属する。

世知原町は、北側には末ノ平岳、東八天岳、東側には戸岩平岳、国見岳、南側には小塚岳、横平岳、板山、五蔵岳といった山々が存在し、これらに町の東南北の三方を囲まれている。町の中央部には、国見山系を起点とする佐々川が、南東から北西に向って流れている。町の最高所は、南東端に位置する国見山頂が標高776.74mであり、町の最低所は西端に位置する十郎木場川河口が標高58.2mである。このように、町は南東から北西に向って傾斜しており、この佐々川に沿って細長い盆地が形成され、世知原町の市街地はこの盆地を中心に発達している。また、この河川の浸食作用と地盤の隆起によって、河岸段丘が形成されており、この上に水田や畑といった耕作地や、集落が形成されている。

世知原町が属する北松浦半島は、国見山系の火山活動により噴出した松浦玄武岩に覆われており、基盤層をなす新生代第三紀の水成岩との間に地下水脈が多く形成される。この周辺では、しばしば高い尾根上で湧水し水源地となり、こうした水源地の多くで遺物が採集されている。また、新生代第三紀の侵食景が見られ、旧石器時代には岩陰がよく利用されている。

さて、下羽付遺跡は板山（標高463.7m）から北西に向かって伸びる丘陵上に位置する。佐世保市世知原町市街地から直線距離で約900mである。現在おおよそこの丘陵の西側に沿って県道11号線が存在するが、県道11号線は、丘陵の西北端から市街地に向かって標高差70mを九十九折れで急激に下る。遺跡は急傾斜地の手前、丘陵の先端部に位置する。また、この県道11号線をはさんで、東側の平坦地において湧水が見られ、現在水神様を祀る祠が作られている。現在は杉の植林により視界がさえぎられるが、今より冷涼な環境下など、低木が広がるような状況下では、世知原市街地が存在する小盆地や佐々川をはさんだ向かいの丘陵など、広く見渡すことができる場所であったと考えられる（巻頭カラー１、２）。

参考文献

江迎町教育委員会1998『広久保遺跡』江迎町文化財調査報告書　第１集
片岡肇編1976『長崎県北松浦郡世知原町岩谷口遺跡群の発掘調査』世知原町教育委員会　財団法人古代学協会
長崎県小佐々町教育委員会1985『古田遺跡』小佐々町文化財調査報告書第１集
世知原町郷土誌編纂委員会編1971『世知原町郷土誌』世知原町役場
世知原町郷土誌編纂委員会編1990『せちばる』世知原町

2．歴史的環境

佐世保市に所在する佐々川流域及び相浦川流域には、旧石器時代から縄文時代にかけての洞窟遺跡が多く存在し、その調査研究の蓄積も多い。佐々川流域にある福井洞穴遺跡においては、昭和35年（1960年）には日本考古学協会西北九州調査特別委員会により発掘調査が実施され、隆起線文土器と細石器との共伴、およびその下層において細石器の単純層を確認した。さらに相浦川流域にある泉福寺洞穴遺跡においては、昭和45年から10次にわたる発掘調査が実施され、福井洞穴で確認されていた隆起線文土器および爪形文土器と細石器の共伴関係を追認するとともに、さらに隆起線文土器より前段階の豆粒文土器の存在を確認した。このような成果から佐世保市は洞窟調査を継続し、現在25箇所の洞窟遺跡を発見し、その大部分について発掘調査あるいは地形測量が行われている。佐々川流域および相浦川流域において、福井洞穴遺跡および泉福寺洞穴遺跡が、それぞれ継続的に利用する拠点洞窟と考えられているが、佐々川流域には、狩猟採集活動における出先のような役割が考えられる衛星洞窟として、直谷稲荷神社岩陰遺跡、牧野岳洞穴、橋川内洞穴、岩谷口第１、第２岩陰遺跡が分布している。

このような洞窟遺跡に加え、佐世保市周辺では、台地上の湧水が見られる地点において、旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が点在する。佐世保市江迎町では、根引池遺跡（旧石器時代～縄文時代）、広久保遺跡（縄文時代）といった遺跡がこれまで調査されており、広久保遺跡においては、南九州に主に分布する連結土坑という特殊な遺構が検出されている。下羽付遺跡が所在する佐々川流域において、オープンサイト（開地遺跡）の発掘調査実施例は、撹乱層から旧石器時代の遺物を確認した下開作遺跡に限られている。現状では、洞窟遺跡の情報蓄積が先行している状況にあるが、旧石器

第２図　下羽付遺跡周辺遺跡分布図

第１表　　下羽付遺跡周辺遺跡一覧表

番号	名称	種別	出土品等	時代	所在地
1	福井洞窟	洞穴・岩陰	隆線文土器、細石刃、小石刃ほか	旧・縄	佐世保市吉井町福井免字岩下
2	直谷城跡	城館跡		中世	〃　〃　直谷免字内浦
3	吉野遺跡	遺物包含地	中国明代青磁片	〃	〃　〃　〃　字古野
4	直谷城主墓	墳墓・石造物		〃	〃　〃　〃　字乙永
5	上直谷岩陰	洞穴・岩陰	安山岩製の石核、剥片など	縄文	〃　〃　字岩下
6	稲荷神社岩陰遺跡	〃	細石刃器、弥生土器、土師器、瓦器椀	旧縄弥古中	〃　〃　直谷免字宮崎
7	不動明王谷岩陰遺跡	〃		縄文	〃　〃　〃　字正面
8	福井窯跡	窯跡		近世	〃　〃　〃　字勘場
9	牧ノ岳洞穴	洞穴・岩陰	押型文土器、鐘ケ崎式土器、石鏃、石核ほか	縄文	〃　〃　直谷111番地１
10	吉元遺跡	遺物包含地	石鏃（三角鏃）、石匙、ブレイド	先・縄	〃　〃　吉元字吉元
11	吉田城跡	城館跡		中世	〃　〃　田原免字大道添
12	山手五輪塔	墳墓・石造物		〃	〃　〃　下原免字大井手
13	正平寺跡	社寺跡		〃	〃　〃　田原免字鍛冶屋
14	乙石尾遺跡	遺物包含地	石鏃	縄文	〃　〃　乙石尾免字乙石尾
15	牟田張遺跡	〃	台形様石器、曽畑式土器、滑石鍋片ほか	旧・縄・平	〃　小川内町牟田原開拓地
16	五蔵池遺跡	〃		縄文	〃　吉井町字五蔵、八ノ助、大池の平、大池
17	上吉田遺跡	〃	押型文土器ほか	〃	〃　〃　上吉田免字上吉田
18	菰田遺跡	〃		旧・縄	〃　菰田町乙石
19	こも田洞穴	洞穴・岩陰	土器片、石鏃、石匙、スクレイパーほか	縄文	〃　〃　水源地北側砂岩露頭崖
20	江里峠遺跡	遺物包含地	ナイフ型石器、台形様石器、彫器、掻器	旧石器	〃　世知原町長田代
21	板山遺跡	〃	石鏃、黒曜石片	縄文	〃　〃　上野原免字板山
22	板山下遺跡	〃	黒曜石片	旧・縄	〃　〃　〃　免字板山下
23	下羽付遺跡	〃	石鏃、黒曜石片	縄文	〃　〃　矢櫃免字下羽付
24	笥瀬遺跡	〃	石鏃	〃	〃　〃　笥瀬免字梶田出口・保田地・小森
25	焼山遺跡	〃	黒曜石片	〃	〃　〃　栗迎免字路木場
26	世知原氏館跡	城館跡		中世	〃　〃　中通免字中通
27	下開作遺跡	遺物包含地	黒曜石	縄文	〃　〃　開作免上ノ原
28	牟田池遺跡	〃		〃	〃　〃　牟田免字牟田
29	黒石池遺跡	〃	土器、細石刃、細石核、ナイフ、石鏃他	旧・縄	〃　〃　栗迎免字黒石
30	柳原池遺跡	〃	剥片、（黒曜石、サヌカイト）掻器	縄文	松浦市志佐町稗木場免字仙須計
31	竹田池遺跡	〃	尖頭器、剥片、ハンマストーン、石鏃	〃	佐世保市世知原町木浦原免字竹田原
32	串田池遺跡	〃	滑石製石鍋破片	中世	〃　〃　梶木場免字串田
33	岩谷口第１岩陰遺跡	洞穴・岩陰	押型文土器、曽畑式土器、石器ほか	旧・縄	〃　〃　笥瀬免字太岩
34	岩谷口第２岩陰遺跡	〃	押型文土器、曽畑式土器、石器ほか	〃	〃　〃　笥瀬免字太岩
35	木浦遺跡	遺物包含地	磨製石剣、土器	縄文	〃　〃　木浦免字塔ノ本
36	都蔵寺の墓	墳墓		中・近	〃　〃　大田免字鍋ヶ倉
37	橋川内洞窟遺跡	洞穴・岩陰	押型文土器、弥生土器、土師器ほか	縄・弥・古	〃　〃　橋川内免字松原
38	平山遺跡	遺物包含地	剥片鏃、局部磨製石鏃	縄文	〃　〃　岩谷口免字平山
39	中谷洞穴	洞穴・岩陰	弥生土器、剥片、青磁片	縄・弥・平・中	〃　〃　岩谷口免札の本2015番地
40	長田池遺跡	遺物包含地	両面加工石器(安山岩製)、ナイフ型石器ほか	旧石器	〃　吉井町梶木場免字長田
41	刀の越千人塚	墳墓(積石墓)		中世	〃　〃　梶木場免字長田

時代から縄文時代にかけての狩猟採集活動の形態の変化について検討する上で、こうしたオープンサイト（開地遺跡）の情報の蓄積が重要であり、今後情報の蓄積が進んでいくものと考えられる。

福井洞窟遺跡にほど近い直谷稲荷神社岩陰遺跡での調査によって、縄文時代前期から晩期、弥生時代前期から中期、古墳時代、さらには中世にわたる時期の遺物が検出されている。特に弥生土器の胴部片及び底部片に籾圧痕が確認されることは、佐々川流域の沖積地の土地利用の可能性を示し、今後沖積地での発掘調査によりこの地域の歴史が明らかになるものと思われる。

世知原町周辺は、13世紀以降、1871年の明治政府による廃藩置県に至るまで、おおよそ700年間にわたり、数々の戦いや領主の交代を経ながら、松浦党と呼ばれる集団に統治されてきた。その始原は11世紀初頭に遡る。

平安時代の寛仁三年（1019年）、松浦地域に襲来した刀伊とよばれる外敵（女真族）からの攻撃に対し、源知という人物が一族を率いて刀伊と戦い、侵攻を許さなかったという記録が、『小右記』と『朝野群載』に残されている。『松浦家世伝』によれば、その後1069年に源久という人物が、肥前国松浦郡志佐郷に御厨検校および検非違使として下向され、1096年にはこの地に梶谷城跡を築造したと記録されている。この源久の孫である源披は、松浦党の祖とされる人物であり、建久三年（1192年）、田平町の里田原と呼ばれる小盆地の北側に所在する里城に城を構えたとされている。源披は、里城に移り住んで後、峯氏を名乗るようになるが、この披の甥に当たる志佐六郎貞が、13世紀前半に直谷城に移り住んでより、この地の支配が行われたようである。13世紀末頃には２度の元寇、また14世紀には南北朝動乱に際し、勢力の保持と拡大を目指して度々出陣した。14世紀末には、在地領主世知原氏の記録があり、このころには世知原を領有した世知原氏の存在が確認される。16代400年の統治の後、戦国時代初期の明応年間（1492～1501）にかけて、志佐氏は大村氏と龍造寺氏の連合軍からの攻撃を受け滅亡する。

これに遡る1491年、田平の里城を拠点とする峯昌と、平戸を拠点とする松浦弘定による「田平・平戸合戦」があり、周防を拠点とする守護大名である大内義弘の仲介により、昌は息子の太郎を弘定の後継とすること、田平を弘定に譲ることを条件に和睦に至った。この後、昌は上記戦乱により城主不在となっていた直谷城の城主となり志佐氏を名乗った。昌の四男貞治が世知原氏を継ぐことになり、世知原氏は、松浦氏の勢力に併呑されることとなるのである。

参考文献

江迎町教育委員会1998『広久保遺跡』江迎町文化財調査報告書　第１集

江迎町教育委員会2000『根引池遺跡』江迎町文化財調査報告書　第２集

片岡肇編1976『長崎県北松浦郡世知原町岩谷口遺跡群の発掘調査』世知原町教育委員会　財団法人古代学協会

佐世保市教育委員会2006『佐世保の洞窟遺跡　～洞窟遺跡総合調査報告書～』平成17年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書

佐世保市教育委員会2010『佐世保の洞窟遺跡Ⅱ』佐世保市文化財調査報告書　第３集

佐世保市教育委員会2010『市内遺跡発掘調査報告書　直谷稲荷神社岩除遺跡　上野遺跡　門前遺跡　小野Ｃ遺跡　笥瀬遺跡　大潟Ｄ遺跡　幕間堰遺跡』佐世保市文化財調査報告書　第４集

佐世保市教育委員会2013『史跡福井洞窟発掘調査速報』佐世保市文化財調査報告書　第10集

外山幹夫編1980『日本城郭大系第17巻長崎・佐賀』新人物往来社

長崎県教育庁文化課埋蔵文化財班編1997『原始・古代の長崎県資料編Ⅱ』長崎県教育委員会

長崎県教育委員会1999『長崎県埋蔵文化財調査年報（平成11年度調査分）』長崎県文化財調査報告書　第158集

長崎県教育委員会2004『長崎県埋蔵文化財調査年報11（平成14年度調査分）』長崎県文化財調査報告書　第175集

長崎県教育委員会2011『長崎県中近世城館跡分布調査報告書Ⅰ地名表・分布地図編』長崎県文化財調査報告書　第206集

久村貞夫2008「第４節　まとめ」『市内遺跡発掘調査報告書・平成19年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書』

吉井町教育委員会1991『直谷城跡』吉井町文化財調査報告書　第１集

Ⅲ　調査の概要

1．調査の概要

調査の対象は、長さ約150m最大幅９ｍの三日月形である（第３図、巻頭カラー２）。調査区は、座標系（世界測地系）により４ｍ×４ｍグリッドを設定し、南北方向をＡからＶ、東西方向を１から12と符合した（第４図）。調査は重機による表土の掘削を行った後、人力による精査を行った。

調査地は、Ⅱ章１節「地理的環境」で述べたように、急傾斜地の手前、丘陵の先端部に位置し、調査の対象地は比較的平坦である。現状では丘陵の先端に近い側が耕作地、丘陵から離れる側が竹林である。

下羽付遺跡では、これまで発掘調査がなされておらず、遺跡の内容については明らかにされていない。範囲確認調査では、黒曜石剥片、石鏃、および磨製石斧等の縄文時代の遺物を包含する層が確認されている。当初、縄文時代早期頃の時間的なまとまりをもった包含層の可能性が考えられたことから、石器製作や使用の単位としてのユニットを見出すことを目的として、本調査を行った。

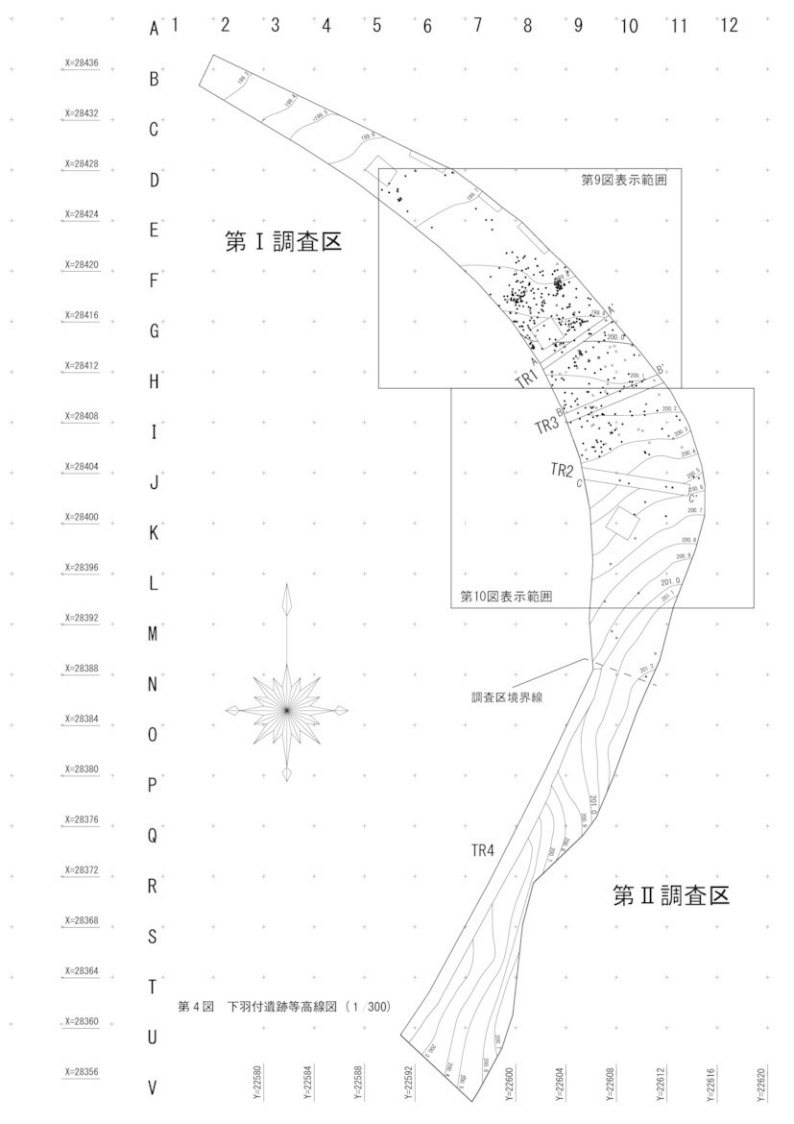
掘削は基本的には移植ゴテや手鍬等を用いて慎重に行うことを原則とした。ただし、遺物の検出が見込まれない場合には、剣先スコップで掘削するなどメリハリをつけて行う場面もあった。また遺物の取り上げは光波測距儀を用い、座標（世界測地系）および標高を記録しながら行った。掘削の過程で出土位置がわからなくなった遺物等については、４ｍ×４ｍグリッドを更に２ｍ×２ｍの小グリッドに分割し、調査区の北西側から時計回りに、ａ～ｄと符合して、取り上げを行った。

調査は、調査地が狭隘であることから、調査地の屈曲部より北側を第Ⅰ調査区、南側を第Ⅱ調査区とし、第Ⅰ調査区の調査終了後に重機を第Ⅰ調査区内に移動して、第Ⅱ調査区の調査を行った。

第Ⅰ調査区には、北から第１トレンチ（TR１）、第３トレンチ（TR３）、第２トレンチ（TR２）の３本のトレンチを設定し、土層を確認した（第４図、第７図）。第３トレンチについては、調査の最終段階で、確認のために北側に拡張して、堆積状況を確認した（図版４下）。第Ⅱ調査区においては、調査区の西側にトレンチを設定し、土層を確認した（図版１上）。

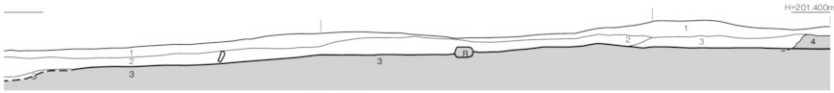
調査地は上記のように、耕作地である。Ⅲ章２節「層位」の項で述べるように、これと風化玄武岩台地との間に挟まるおおよそ0.3m程度の包含層（第２層）の中に、遺物が多く見られた。また後述するように、部分的かつ深浅をもって体積する層（第３層）にも遺物が含まれることが、調査の最終段階で明らかになった。

第３図　下羽付遺跡周辺図



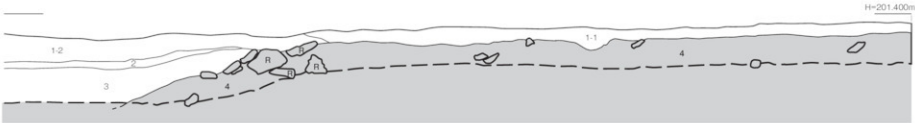
第４図　下羽付遺跡等高線図（１　300）

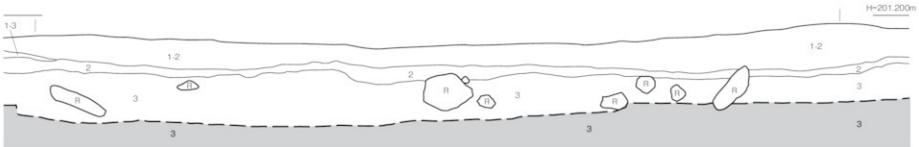
第５図　下羽付遺跡土層図①（１／60）



Ⅰ区東壁土層注記

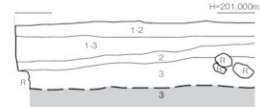
1.暗褐色土(10YR3/4)しまりやや弱い。粘性やや強い。木の根を多く含む。炭化物を含む。(現代耕作土)
1～2.褐色土(7.5YR4/4)しまり弱い。粘性やや強い。地山に限り込む形で底まで同一の土が一律に見られる。30cm～60cmの大礫(円礫)が多く見られる。
2.褐色土(7.5YR4/4)しまり強い。粘性やや強い。炭化物小片を含む。遺物を多く含む。
3.褐色土(7.5YR4/4)しまり強い。粘性やや強い。2層とはば同質である。2層に比べてやや赤みが強い。(遺物をごく少量含むことが明らかになった。)
4.褐色土(7.5YR4/6)しまり強い。粘性やや強い。2～3cmの黒化玄武岩礫を多く含む(地山)



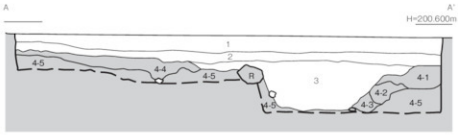


Ⅱ区TR4土層注記

1－1.暗褐色土(10YR3/3)しまりやや強い。粘性やや強い。(現代耕作土)
1－2.褐色土(7.5YR4/6)しまり弱い。粘性ふつう。竹の根を多く含む。(現代竹林の表土)。
1－3.にぶい赤褐色土(5YR4/4)しまりやや弱い。粘性ふつう。0.5cm程度の砂粒を含む。 } 盛土由来
2.黒褐色土(7.5YR2/2)しまりやや強い。粘性やや強い。0.5cm程度の砂をわずかに含む。ガラス片などを検出した。(旧表土)
3.褐色土(7.5YR4/4)しまり強い。粘性やや強い。拳大から人頭大、直径100cm程度の巨礫を含む(遺物は含まない)。
4.赤褐色土(5YR4/6)しまり強い。粘性やや強い。2～3cm程度の黒化玄武岩の角礫を多く含む。人頭大～直径100cm程度の黒化玄武岩礫を多く含む。

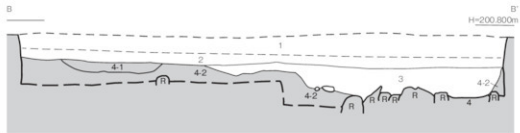


第6図　下羽付遺跡土層図②（1/60）



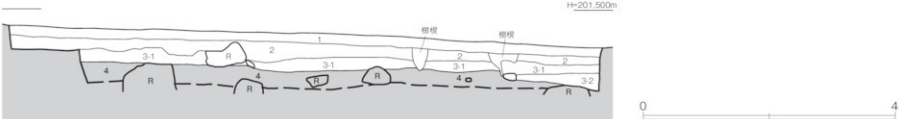
TR1北壁土層注記

1.暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱い、粘性やや強い、木の根を多く含む。炭化物を含む。（現代耕作土）
2.褐色土（7.5YR4/4）しまりやや強い、粘性やや強い、1cm程度の礫をわずかに含む。
　撹は調査区（1区）の東側（図の左側）にやや多い。
3.褐色土（7.5YR4/4）しまりは2層より強い、粘性やや強い、2層に良く似る。
　遺物をごくわずかに含む。
4－1.褐色土（7.5YR4/6）しまり強い、粘性強い、1cm程度の礫をわずかに含む。
　（4－5層と同質であるが、4－1層に近い性質の土が混ざる。）
4－2.褐色土（7.5YR4/4）しまり強い、粘性強い、1cm程度の礫をわずかに含む。
　（4－1層と同質であるが、4－5層に近い性質の土が混ざる。）
4－3.褐色土（7.5YR4/6）しまり強い、粘性やや強い、拳大から人頭大の黒化玄武岩礫を含む。
4－4.褐色土（7.5YR4/4）しまりは3層より強い、粘性強い、2－5cm大の黒化玄武岩礫をまばらに含む。
4－5.暗褐色土（5YR3/4）しまり強い、粘性強い、拳大から人頭大の黒化玄武岩礫を多く含む。



TR3北壁土層注記

1.暗褐色土（10YR3/4）しまりやや弱い、粘性やや強い、木の根を多く含む。炭化物を含む。（現代耕作土）※
2.褐色土（7.5YR4/4）しまりやや強い、粘性やや強い、1cm程度の礫をわずかに含む。※
3.褐色土（7.5YR4/4）しまりは2層より強い、粘性やや強い、2層に良く似る。遺物をごくわずかに含む。
4－1.褐色土（7.5YR4/4）しまり強い、粘性強い、1cm程度の礫をわずかに含む。（TR1北壁4－4層に対応）
4－2.褐色土（7.5YR4/6）しまり強い、粘性やや強い、拳大から人頭大の黒化玄武岩礫を含む。
　調査区の東側（図の右側）には大型の礫が密集する。（TR1北壁4－5層に対応）
　※　表土及び2層除去後に記録したため、1層、2層の境は推定線。



TR2南壁土層注記

1.暗褐色土（10YR3/4）しまりやや強い、粘性やや強い、木の根を多く含む。炭化物を含む。（現代耕作土）
2.褐色土（7.5YR4/4）しまりやや強い、粘性やや強い、1cm程度の礫をわずかに含む。
3－1.褐色土（5YR4/4）しまり2層より強い、粘性やや強い、2層に似る。
3－2.褐色土（7.5YR4/3）しまり強い、粘性強い、3層よりは同質。
4.褐色土（5YR4/3）しまり強い、粘性強い、1－2cmの黒化玄武岩の角礫を多く含む。人頭大～直径80cm程度の黒化玄武岩礫を多く含む。TR1北壁土層図の4－5層に対応する。（地山）

2．層　位

調査地は、丘陵の先端部にあり比較的平坦である。調査開始時の状況では、第Ⅰ調査区側が県道11号線より1m程度高くなっており、県道側はすでに削平されている。第Ⅱ調査区側では、逆に県道側が2m程度高くなっており、第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区の境付近で、県道と現地表面とのレベル差がほぼ無くなる。

第Ⅰ調査区

土層の堆積状況は比較的単純であり、現代耕作土を中心とした第1層、縄文時代の遺物を多く包含する第2層、第2層とほぼ同質ながら2層に比べてしまりの強い第3層、玄武岩風化土であり大形の円礫を多く含む第4層、以上の4層からなる。

第1層は現代耕作土である。現状では主に畑地であるが、お茶の木が垣根のように並んで栽培されている箇所もあり、樹根が下層まで深く及ぶ箇所もあった。また、耕作地中に出てきた石をまとめて埋め込んだ小土坑のようなものも複数見られたが、ガラス片が混じる近代以降のものであった。

第2層はおおよそ20～30cmの厚さを持ちながら、D5グリッドから南側、第Ⅰ調査区のほぼ南端にいたるまで比較的均一に広がりが見られた。C5グリッドより北側には基本的には第2層の広がりは確認されず、現代耕作土の直下は第4層（地山）であった。しかしながら、D5グリッドでは地山の上に、調査区の東側から西側に向って深度を増すようにして、厚さ30cmの第2層の堆積が見られた。

第3層はTR1、TR3周辺では窪みに溜まるようにして見られ、TR2周辺では20～30cm程度の厚さで面的に広がっていた。

第4層は玄武岩風化土をベースとした無遺物層である。大形の円礫を多く含む（第5図、第6図）。

遺物は第2層と第3層から検出した。試掘調査の結果、およびTR1～TR3の設定による土層の確認によって、第3層は無遺物層である、という認識で調査を行った。しかし、調査の最終段階においてTR3を北側に拡張する形で第3層の掘削を行ったところ、遺物を包含することが明らかとなった。遺物の包含量は、第2層に比べて著しく少ないが、黒曜石製石鏃1点（第11図-1）のほか、剥片数点を検出した。

第Ⅱ調査区

土層は大きく分けて、現代耕作土と埋立て土からなる第1層、旧地表土である第2層、無遺物層である第3、4層の4層からなる。

第1層は現代耕作土及び埋立て土である。埋立ては山側の県道11号線側が厚く2.0mほど、調査区の西壁側では0.5～0.6mほどなされていた。色調等の特徴は第3層や第4層といった周辺の無遺物層に酷似し、周辺の土地を削って埋め立てを行った可能性がある。

第2層は旧地表土である。黒褐色（7.5YR2/2）を呈し、ガラス片等現代のゴミを検出した。

第3層、第4層は無遺物層である。人頭大から直径1.0m程度の風化玄武岩円礫が多く見られた（第6図）。

3．遺物の分布状況について

第Ⅰ調査区について（第４図）

第Ⅰ調査区では、表土（現代耕作土）及び第２層において、遺物が多く確認された。第Ⅲ章２節「層位」に記述したように第２層は、20～30cmの厚みを持って面的に広がりをもって堆積している。Ｄ５グリッドを中心とした範囲には、第２層が30cmの厚さを持って堆積しており、遺物の分布も見られた。特に遺物の集中が見られたのは南北グリッドラインＦ～Ｉ、東西グリッドライン７～10の範囲においてである。特にＦ８グリッドにおいて著しい集中が見られる。I10グリッドより南側では、遺物の分布の密度は低い。

１．安山岩剥片の散布状況について（第８図）

第10図は、黒曜石剥片・チップと安山岩剥片の分布を示したものである。安山岩は、第Ⅰ調査区の南側にやや偏って見られた。I10グリッドより南側の遺物の密度が低くなる範囲において安山岩剥片の検出が多い。

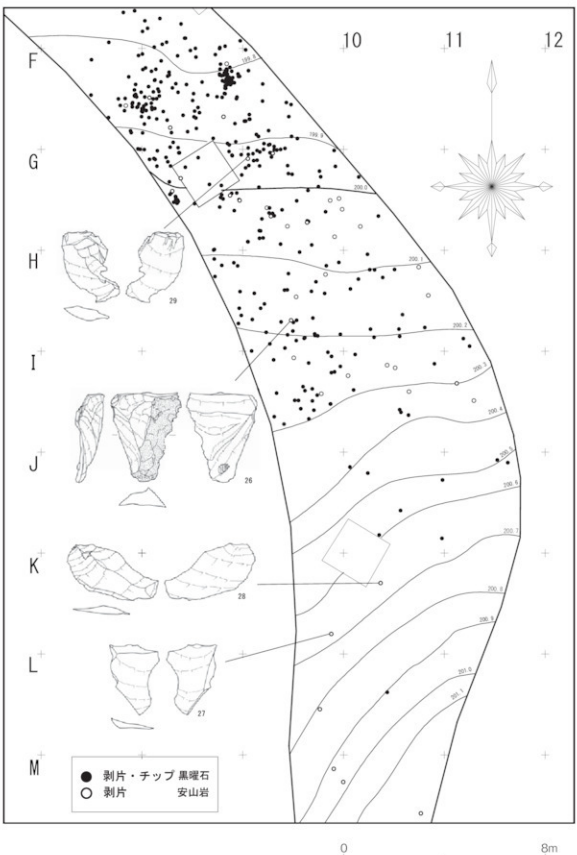
平面図には表現されないが、これらの剥片は、第２層の最下面（第３層との境）において検出された。また検出された剥片は、黒曜石の剥片に比べて法量が大きいという特徴がある。（第12図）

２．石鏃、磨石等の分布状況について（第９図、第10図）

石鏃、磨石等の製品については、２層の広がる範囲に偏りなく分布しており、際立った特徴は見出されない。ただし、I10グリッドより南側からは、剥片のみ検出しており、製品の分布は見られない。

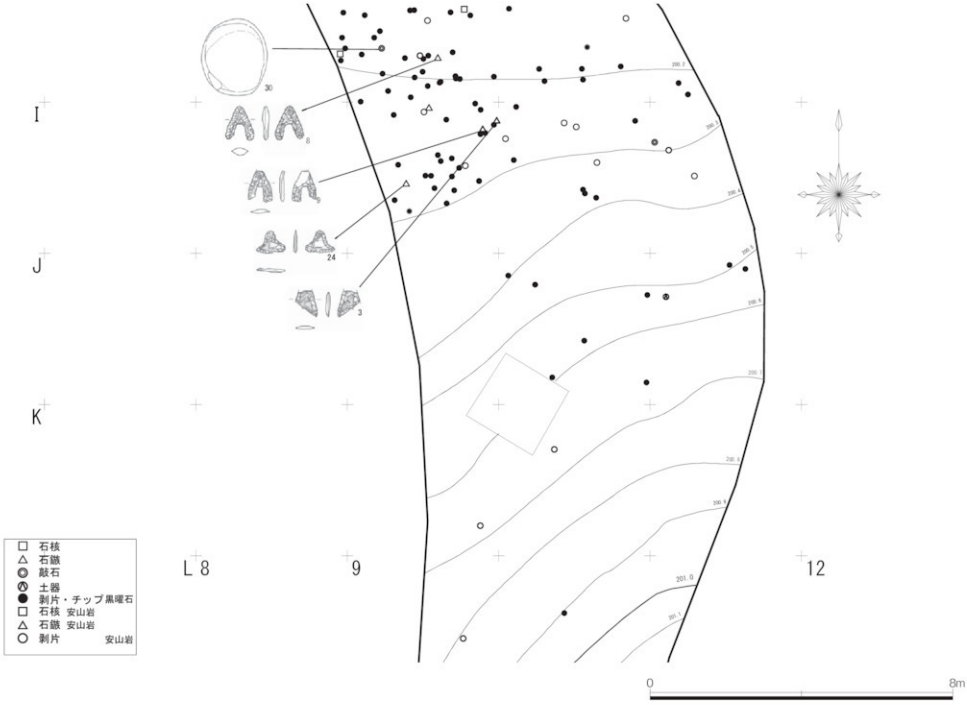
第Ⅱ調査区について

第Ⅱ調査区の調査において遺物は全く検出されなかった。第Ⅲ章２節「層位」に記述したように、盛土（第１層）の下に旧地表土（第２層）が認められた。これらの近現代層の掘削において、遺物が全く検出されず、第Ⅰ調査区において現地表土（耕作土）から多くの遺物を検出したことと対照的である。第２層の下は地山であったため、遺物包含層がもともと無かったのか、近代以前のある時点ですでに失われているのか、判断することは出来ないが、ともあれ遺物の分布状況には著しい差が認められる。



第 8 図　下羽付遺跡黒曜石・安山岩分布図（1 / 150）

第 9 図　下羽付遺跡遺物分布図①（1 / 100）



第10図　下羽付遺跡遺物分布図②（1：100）

Ⅳ　出土遺物

1．第３層出土遺物

第Ⅲ章２節「調査の概要」に記述したように、第３層は無遺物層という認識で調査を行っていた。TR３について調査の最終段階で一部拡張し、第４層までの掘り下げを行ったところ、黒曜石剥片数点と次に紹介する石鏃１点を検出した。

石鏃（１）

１は黒曜石製の石鏃である。尖頭部と基部の間に緩やかな段を持ち、五角形を呈す。厚さは0.2cmと非常に薄い。基部は、抉り部がやや内側に張り出し、端部が鋭く尖る。

2．第２層出土遺物

石鏃（２～23）

２～23は石鏃である。12は安山岩製、16はチャート製、その他は黒曜石製である。

２～３は局部磨製石鏃である。抉り部は浅い凹基である。２は中心部から刃部の近くにまで研磨を施し厚みを減じている。３は腹面側に、主剥離面が残る。

４～17は鍬形鏃である。４は深く丸い抉りを持つ。５は尖頭部の角度が65度と非常に鋭い。６～７は全体的に細いが厚みがある。６は基部が外側にやや開く。７は基部側の端部がやや幅を持ち、抉りの形態はU字状である。８～９は深い抉りを持つ。９は基部の端部の幅が広く、抉りの形状はU字状である。10～16は先端部から基部に向って直線的な刃部が付くもので、深い抉りを持つ。10～12は刃部に非常に細かい調整が施される。13～17は基部がやや内湾し、基部の端部がやや尖るものである。15は、石鏃の素材としての剥片の形状を留めており、側面から見ると湾曲している。腹面側には主剥離面が残る。16は抉りが深く施され、抉り部の付け根が非常に細い。17は先端部の角度が６～16に比べるとやや鈍いが、鋭利である。側面から見ると、厚みがあり、また抉り部から尖頭部にかけて直線的である。

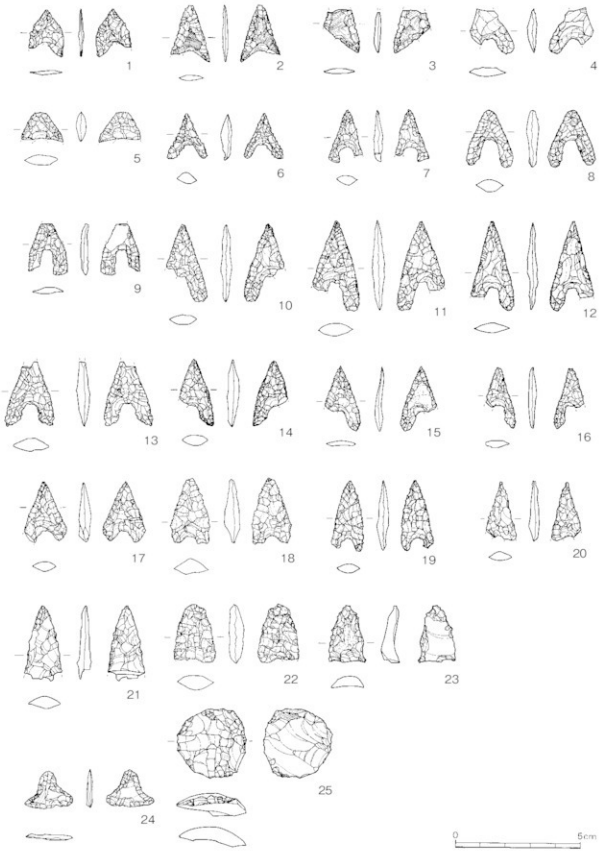
18は浅い抉りを持つ。刃部は粗い剥離によって作出され、厚みが大きい。19は浅い抉りを持ち、基部は丸くて小さい。刃部はやや粗い剥離によって作出される。20は尖頭部の角度が小さく、鋭利である。21は基部を欠損し全体の形状はわからないが、残存している尖頭部の破断箇所から基部まで、まだいくらか長くなることが側面の観察から推測され、他に比べて大形である。22は平基に近い凹基である。先端部は丸く、全体的に厚ぼったい。23は石鏃の未成品である。背面には原礫面が、腹面には主剥離面が残る。

異形石器（24）

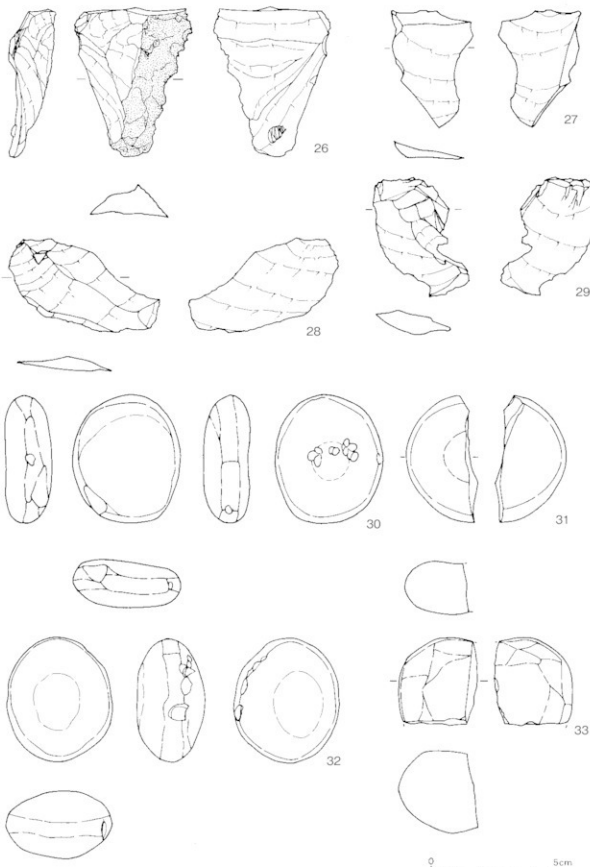
24は異形石器である。図はスクレイパーのような使用法を想定した場合の配置で作図したものである。全体の幅が2.0cmであり、また、つまみ部の幅も0.6cm程度と非常に小さい。厚さも0.2cmと大変薄く、スクレイパーとしての実用に耐えうるかは疑問である。

円形掻器（ラウンド・スクレイパー）（25）

25は円形掻器である。打点に近い側は分厚く、遠い側は薄い。打点の横には原礫面が残り、原礫面を打面とした剥片を使用している。刃部の作出は前記の分厚い箇所を除く腹面側の全体から、中心方向に向って行われている。



第11図　第３層、第２層出土石器（２・３）



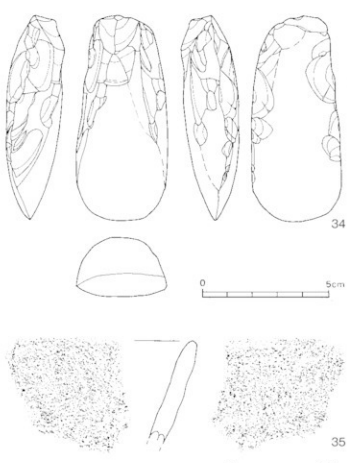
第12図　第２層出土石器（２／３）

安山岩剥片（26～29）

26～29は安山岩の剥片である。いずれも小孔が多く見られる。26は背面に原礫面を残す。腹面には、黒色で長さ8mm幅5mmを計る、角閃石に似たガラス質の鉱物が見られる。27は形状から、石核の角に近い部分を剥離した剥片と考えられるが、背面に観察される剥離面はいずれも同一方向から剥離されている。28は、背面に見られる稜線の形状から、この剥片が剥離される以前に生じた剥片も、28と同様の形状をしていたものと考えられ、ある程度連続的な剥離の中で生じたものと思われる。29は、腹面にバルバースカーが深く刻まれている。

磨石（30～33）

30～33は磨石である。30、31は砂岩製である。30は扁平であり、表裏面および側面に使用面が確認される。裏面および側面の一部には円形の窪みが見られ、敲き石としての使用の痕跡の可能性がある。31はおおよそ半分を欠損する。厚みは30に比べてやや厚い。表面の中央部付近がやや窪んでいる。32は礫岩製である。直径0.1cm～1.5cm程度の砂粒および角礫からなる礫岩が使用されている。全体的にスベスベした質感である。所々に窪みが見られるが、礫の抜け落ちの可能性がある。側面を中心に、にぶい赤褐色（Hue2.5YR5/4）を呈する。被熱の痕跡の可能性がある。33はチャート製である。表裏面および側面に平坦面が確認され、磨石としての使用の痕跡と考えられる。



第13図　第2層出土遺物（2／3、1／2）

磨製石斧（34）

34は凝灰石製の磨製石斧である。試掘調査時に、石斧としては1点のみ検出した。断面カマボコ形を呈する横斧である。基部を除く全面を磨く。側面には、腹面側から背面側に向けての剥離の痕跡を多く留め、その上に研磨がなされている。腹面には、側面から腹面に向けての剥離の痕跡が見られる。刃部は正面から見たとき、右側が上がっており、左右非対称である。

深鉢（35）

35は小破片であるが、深鉢の口縁部であると考えられる。器壁はやや分厚く、焼成はやや甘い。胎土には、石英、長石、雲母、角閃石等が見られるが、粒子の大きさがそろわず、粗雑である。器面は風化が進み、調整は不明である。

第２表　第２層、第３層出土遺物観察表

番号	層位	器種名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	尖頭部(cm)	基部(cm)	抉り長(cm)	抉り幅(cm)	重量(g)
1	3層	石鏃	黒曜石	1.9	1.4	0.2	1.15	0.75	0.6	1.35	0.36
2	2層	〃	〃	2.3	1.6	0.2	1.65	0.65	0.5	−	0.58
3	〃	〃	〃	(1.7)	(1.5)	0.3	−	0.7	0.55	−	0.64
4	〃	〃	〃	(1.8)	(1.8)	0.35	−	0.8	0.6	−	0.76
5	〃	〃	〃	(2.2)	(1.7)	0.4	0.75	−	−	−	0.59
6	〃	〃	〃	1.8	1.6	0.45	0.95	0.85	0.55	1.3	0.62
7	〃	〃	〃	2.1	(1.4)	0.4	1.2	0.9	0.6	−	0.63
8	〃	〃	〃	2.3	1.9	0.5	0.9	1.4	1.1	1.3	1.2
9	〃	〃	〃	(2.05)	1.55	0.3	−	1.15	1.0	−	0.68
10	〃	〃	〃	3.1	(1.6)	0.45	1.6	1.5	1.0	−	1.26
11	〃	〃	〃	3.6	(1.9)	0.5	2.0	1.6	1.1	−	2.14
12	〃	〃	安山岩	3.55	(2.1)	0.4	2.15	1.4	0.9	−	1.66
13	〃	〃	黒曜石	(2.55)	1.95	0.55	−	1.1	0.9	1.75	1.83
14	〃	〃	〃	2.8	(1.25)	0.45	1.5	1.3	0.8	−	0.95
15	〃	〃	〃	2.6	(1.45)	0.3	1.55	1.05	0.8	−	0.66
16	〃	〃	チャート	(2.4)	(1.2)	0.3	−	1.1	0.9	−	0.56
17	〃	〃	黒曜石	(2.4)	(1.7)	0.5	0.6	−	−	−	1.38
18	〃	〃	〃	2.6	1.6	0.65	1.9	0.7	0.3	0.65	17.5
19	〃	〃	〃	2.8	1.3	0.5	2.0	0.8	0.5	0.6	1.21
20	〃	〃	〃	(2.4)	(1.2)	0.4	1.8	−	−	−	0.71
21	〃	〃	〃	(3.1)	(1.5)	0.6	−	−	−	−	1.53
22	〃	〃	〃	(2.3)	(1.7)	0.6	1.9	−	−	−	2.32
23	〃	〃	〃	2.3	1.45	0.6	−	−	−	−	1.93

番号	層位	器種名	石材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）
24	2層	異形石器	黒曜石	1.5	2.0	0.2	0.45
25	〃	円形掻器	〃	2.7	2.8	0.75	6.11
26	〃	剥片	安山岩	6.0	4.7	1.8	31.40
27	〃	〃	〃	4.7	3.3	0.75	7.72
28	〃	〃	〃	3.7	6.1	0.6	10.29
29	〃	〃	〃	4.7	3.0	0.8	10.76
30	〃	磨石	砂岩	10.1	9.6	3.7	500
31	〃	〃	〃	9.9	8.5	5.4	620
32	〃	〃	礫岩	10.1	(5.0)	4.1	280
33	〃	〃	チャート	(7.0)	(6.25)	6.5	440
34	〃	磨製石斧	凝灰岩	8.2	3.65	2.3	82.18

番号	層位	器種名	文様・成形技法・特徴	胎土	焼成	色調（外面）	色調（内面）
35	2層	深鉢	無文	やや粗雑	やや甘い	Hue10YR5/4にぶい黄褐	Hue10YR5/3にぶい黄褐

３．表土出土遺物

石鏃（36～54）

36～54は石鏃である。40はチャート製、その他は黒曜石製である。

36は局部磨製石鏃である。抉り部は浅い凹基である。中心部から刃部に及ぶまで研磨を行っており、一部刃部への調整が磨り消されている。

37は三角鏃である。基部にわずかな抉りをもつ。刃部側から中心に向って薄くて深い剥離がなされる。

38は抉り部が浅い凹基である。腹面側に、主剥離面を残す。厚みは0.25cmと薄い。39～49は鍬形鏃である。39は深い抉りを持つもので、基部の形態はやや尖っている。40は深くて丸い抉りを持つもので、先端部は鋭利であるが、左右からの調整によってやや窪んでいる。中心部に研磨を施す局部磨製石鏃である。41～49はやや内湾する抉り部を持つ。41～43は腹面に、主剥離面を残し、側面形は剥片の湾曲した形状を留る。41は両面に素材剥片製作時の剥離面を残す。44は深い抉りを持ち、基部の形態はやや細くて丸い。刃部に細かな調整を施す。45～47は基部がやや強く内湾するものである。断面は分厚いレンズ状を呈する。48～49は尖頭部の角度が他に比べるとやや鈍い。大きく粗い剥離によって刃部及び抉り部が作出されている。

第14図　表土出土遺物（2／3）

50〜52は、大きく粗い剥離によって成形される。50〜51はやや深い抉りを持つが、抉りにより基部が非常に薄く貧弱になっている。52は浅いへの字状の基部を持つと考えられるが、欠損により不明である。全面に大きく粗い調整を施し、刃部が鋸歯状になったまま残されている。50〜52は未成品、あるいは失敗品の可能性がある。

53は基部を欠損するが、丸くてやや浅い抉りを持つものである。尖頭部の角度が小さく、鋭利である。また刃部に細かい調整を施す。断面は分厚いレンズ状である。

54は鈴桶技法による剥片鏃である。採集品である。背面には二方向からの剥離の痕跡が認められる。抉りは背面側と腹面側の両方から施される。刃部の調整は幅1mm以下の微細な剥離を、部分的に連続して施す。尖頭部の先端については欠損するため不明である。

スクレイパー（55）

55はスクレイパーである。おおよそ全体の半分程度を欠損する。背面は原礫面を残し、腹面には剥離はほとんど見られない。刃部は、腹面側から背面側に向っての剥離によって作出される。刃部の作出においては、大きくて深度の深い剥離の後、刃つぶしが施される。刃つぶしは、特に鋭角を呈す切先において入念になされ、切先に限って背面側から腹面に向っての剥離が見られる。

第3表　表土出土石器観察表

番号	層位	器種名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	尖頭部(cm)	基部(cm)	抉り長(cm)	抉り幅(cm)	重量(g)
36	表土	石鏃	黒曜石	1.8	1.4	0.2	1.3	0.5	0.3	1.35	0.47
37	〃	〃	〃	2.25	2.2	0.5	−	−	−	−	2.41
38	〃	〃	〃	(2.2)	1.8	0.25	−	0.9	0.5	1.7	0.74
39	〃	〃	〃	2.6	1.6	0.35	1.3	1.3	0.9	−	0.92
40	〃	〃	チャート	2.95	1.8	0.3	1.85	1.1	0.9	0.9	1.26
41	〃	〃	黒曜石	1.95	1.6	0.3	1.05	0.9	0.7	−	0.68
42	〃	〃	〃	2.2	1.5	0.4	1.2	1.0	0.7	−	0.67
43	〃	〃	〃	2.55	1.6	0.4	1.55	1.0	0.75	−	1.28
44	〃	〃	〃	2.4	1.45	0.45	1.3	1.1	0.8	−	1.2
45	〃	〃	〃	(2.35)	1.75	0.5	−	1.2	0.9	−	1.34
46	〃	〃	〃	2.6	2.0	0.5	1.6	1.0	2.0	−	1.75
47	〃	〃	〃	2.1	1.85	0.5	1.55	−	−	−	1.27
48	〃	〃	〃	2.35	1.85	0.4	1.3	1.05	0.75	−	0.91
49	〃	〃	〃	2.8	1.5	0.45	1.6	1.2	0.9	−	1.23
50	〃	〃	〃	2.0	1.45	0.45	1.1	0.9	0.6	−	0.69
51	〃	〃	〃	2.9	1.7	0.5	1.7	1.7	1.2	1.05	1.58
52	〃	〃	〃	2.7	1.65	0.55	−	1.0	0.25	−	1.75
53	〃	〃	〃	(2.15)	1.35	0.4	−	−	−	−	0.79
54	採集品	〃	〃	2.0	1.5	0.4	1.1	0.9	0.5	1.0	0.66
55	〃	スクレイパー	〃	4.7	4.95	1.2	−	−	−	−	24.12

Ⅴ 総　括

第Ⅱ章１節「地理的環境」に記したように、下羽付遺跡は板山から北西向かって伸びる丘陵の先端部に位置する。今回調査を行った地点は、急傾斜地の手前の比較的平坦な尾根上の地点である。同章２節「歴史的環境」に記したように、佐々川流域には福井洞穴を拠点洞窟とする洞窟遺跡が分布しており、こうした洞窟遺跡の調査には研究の蓄積があるが、現状ではオープンサイト（開地遺跡）の調査事例は少ない。

今回、最も多くの遺物を検出した第２層からは、局部磨製石鏃や鍬形鏃など、縄文早期を中心とする石器類を検出した。また黒曜石の縦長剥片が見られ、これらは縄文時代後期の鈴桶技法による石刃の製作に伴って作り出された剥片の可能性がある。また採集品であるが、調査地点において鈴桶技法の剥片鏃が見つかっている。これらを考え合わせて、第２層の年代は「縄文時代早期から後期にかけて」とするのが穏当である。

第Ⅲ章第２項で示したように、調査の最終段階で第３層の精査を行ったところ、ごく僅かながら遺物を包含することが明らかとなったが、完掘にいたらず調査を終了せざるを得なかった。また第２層から、山形押型文土器の小片を検出したが、報告者の不注意により整理作業の過程で器面が剥落してしまった。

今回の調査で検出した遺物の大部分は石鏃等の狩猟具である。また、こうした剥片石器の加工に伴う黒曜石、安山岩を中心とした剥片を多数検出した。これに加えて、土器や磨石等の居住空間に付帯する遺物も僅かにみられたが、遺構は全く検出されなかった。

このことから、調査地点は狩猟活動を行う際のキャンプサイトとしての性格が考えられる。遺跡の東側（現状では県道11号線をはさんだ山手側）には湧水が見られ、丘陵の先端部から佐々川流域を広く見下ろす本地点は、狩猟の準備や、獲物の待ち伏せで短期間待機する場合に便利な環境であったと想像される。

また、表土に含まれる遺物は、近代以降と考えられるものが少量含まれるのみで、弥生時代や古墳時代、中世など、縄文時代以降の遺物は全く見られなかった。これは、縄文時代早期から後期にかけての遺物が多く見つかったことと対照的である。このことは、縄文時代早期から後期にかけての時期には、この地点が頻繁に利用されたこと、その後、比較的最近に可耕地が拡大されるまで土地利用が非常に少なかったことを示す可能性がある。

この地域の歴史、特に縄文時代の遺跡の相互関係の解明に資する情報を得ることができた。

下羽付遗址的考古发掘

下羽付遗址是一处被定为绳文时代的遗址。2015 年 6 月 29 日至 2015 年 8 月 14 日，为配合主要地方道路佐世保日野松浦线的整修，长崎县埋藏文化财中心对工程范围内进行了考古发掘。本次发掘的区域为弯月型，长约 150 米，最宽处可达 12 米，面积为 742 平方米。

由于该遗址揭露表土后直接进入绳文时代的文化层，因此没发现其它时期的遗物。本次发掘出土了绳文时代早期的石簇、磨石及石斧和绳文陶片等。陶片上没有任何纹饰，因而无法以此来判断其年代。在遗址附近采集到了九州特有的“铃桶型石刃技法”打制的石器。根据这些石器可以推定该遗址的年代为绳文时代早期至绳文时代晚期。

（翻訳：王逢来）

시모하쯔키(下羽付) 유적의 발굴조사

시모하쯔키(下羽付) 유적은 조몽(縄文) 시대의 유물 포함지로서 알려진 유적이다. 주요 지방도 사세보 히노 (佐世保日野) 마쯔우라 (松浦) 선 도로 개량 공사로 인해 2015 년 6 월 29 일에서 2015 년 8 월 14 일에 걸쳐서 발굴 조사를 실시했다. 발굴 조사구는 길이 약 150m,최대폭 12m 이고 초생달 모양을 보이며, 조사 면적은 742 ㎡이다.

발굴 조사의 결과, 조몽 시대 조기부터 조몽 시대 후기에 걸친 유물 포함층의 넓어지기를 확인했다. 유물 포함층은 표토 직하에 넓어지고,다른 시기의 유구·유물은 보여지지 않았다. 포함층에서 출토된 유물은 조몽 시대 조기의 석촉, 갈돌, 마제석부 등 대부분이 석기류이었다. 조몽 토기의 작은 파편도 보여졌지만 무문이며 자세한 시기를 알 수 없었다. 또 표면 채집 자료로서 수즈오케(鈴桶) 기법로 제작된 박편 석기를 검출했다. 출토된 유물을 바탕으로, 유물 포함층의 연대는 조몽 시대 조기부터 후기로 판단했다.

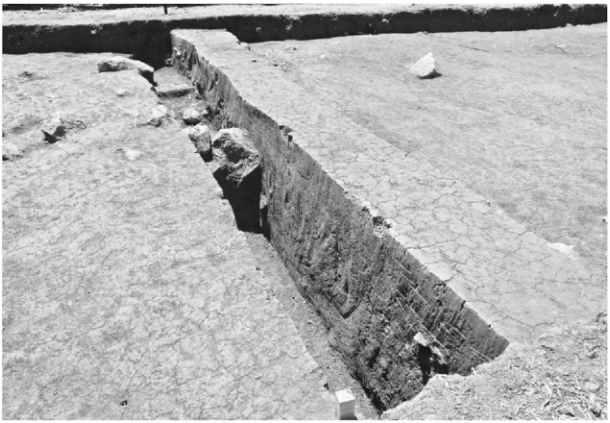
（翻訳:古澤義久）

第Ⅰ調査区調査終了状況

図版 1　　第Ⅱ調査区調査終了状況

第Ⅰ調査区 2 層完掘状況①

図版 2　　第Ⅰ調査区 2 層完掘状況②



第 1 トレンチ土層観察

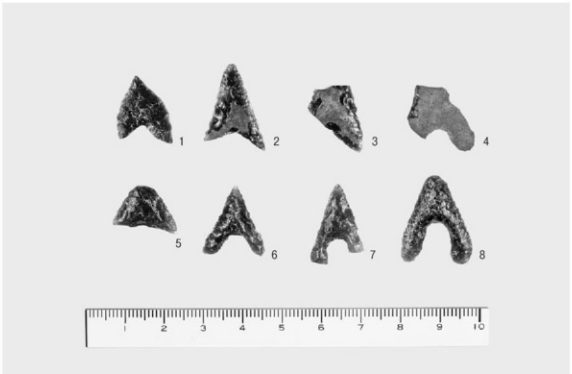
図版 3　　第 2 トレンチ土層観察

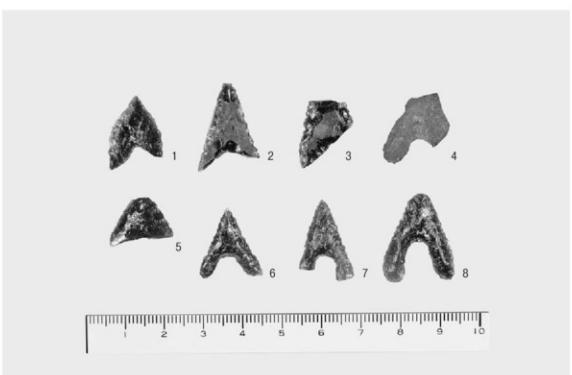
第 3 トレンチ土層観察

図版 4　　第 3 トレンチ拡張状況

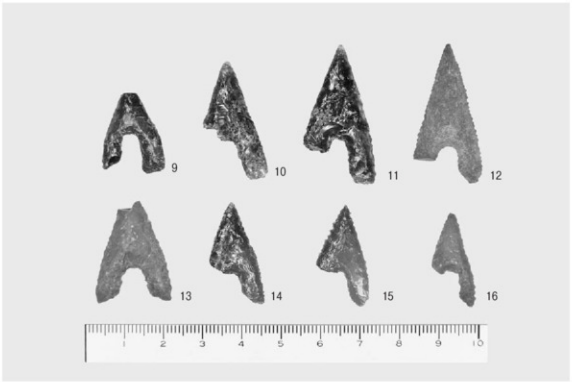
第Ⅱ調査区表土除去後状況

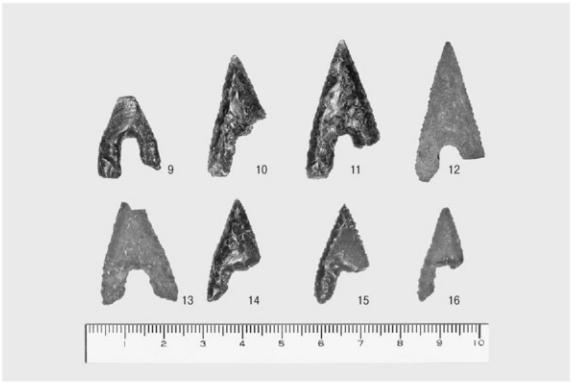
図版 5　　第 4 トレンチ土層観察



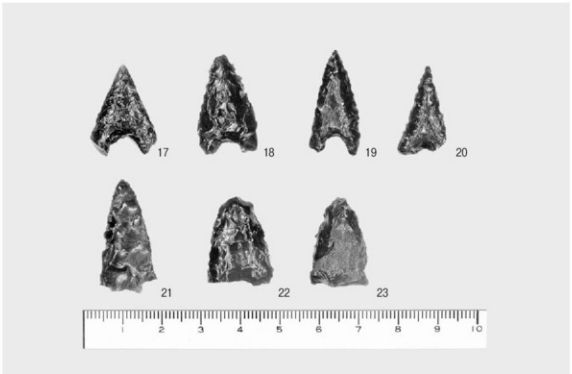


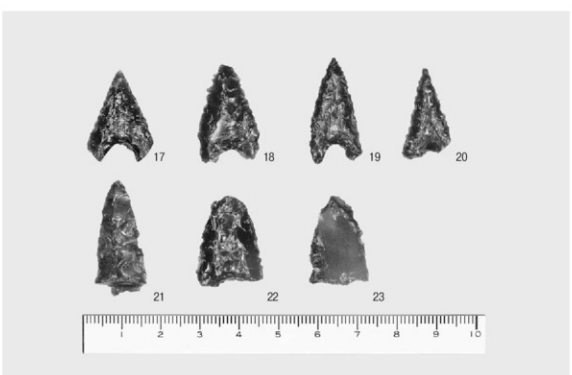
図版 6　下羽付遺跡出土遺物①



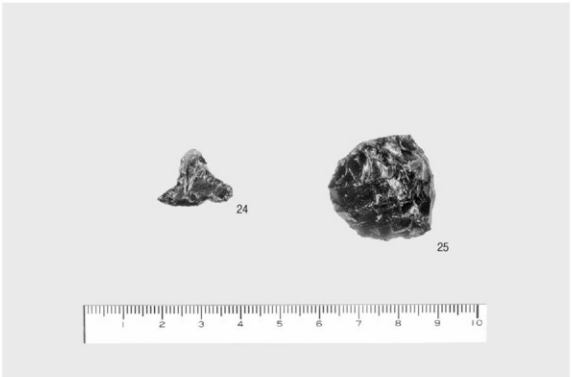


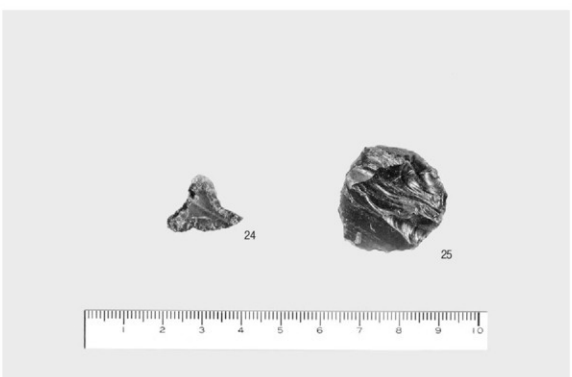
図版７　下羽付遺跡出土遺物②



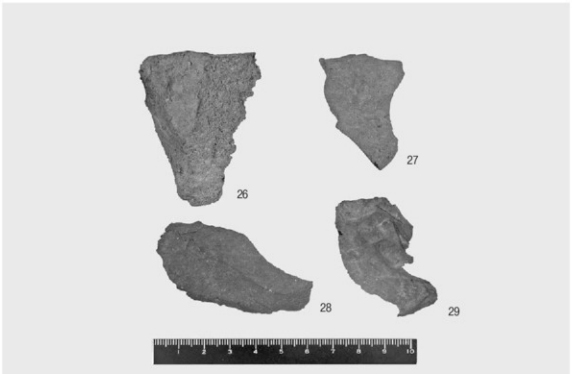


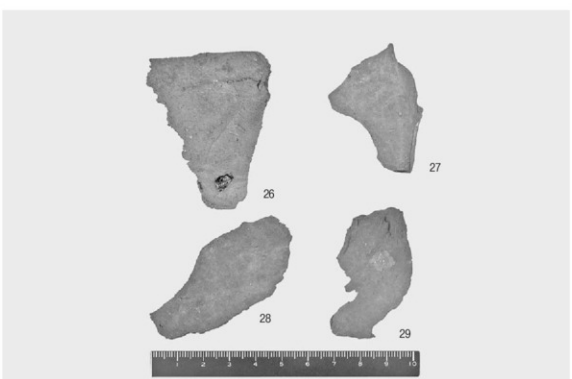
図版 8　下羽付遺跡出土遺物③



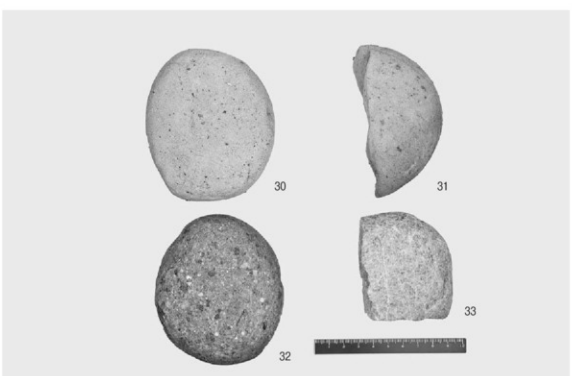


図版 9　下羽付遺跡出土遺物④



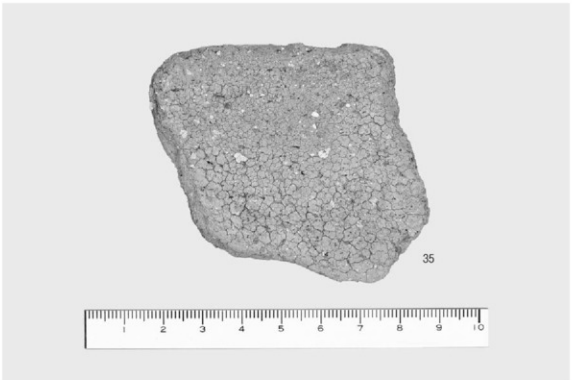


図版10　下羽付遺跡出土遺物⑤

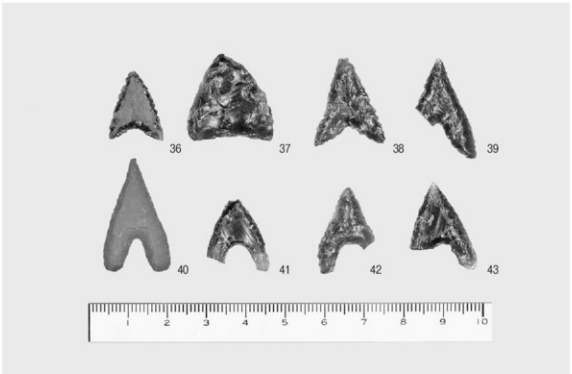


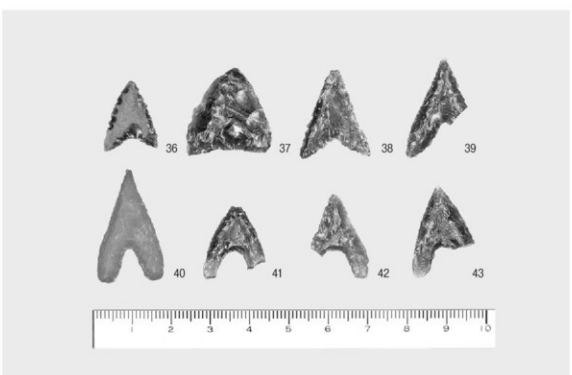
図版11　下羽付遺跡出土遺物⑥

図版12　下羽付遺跡出土遺物⑦

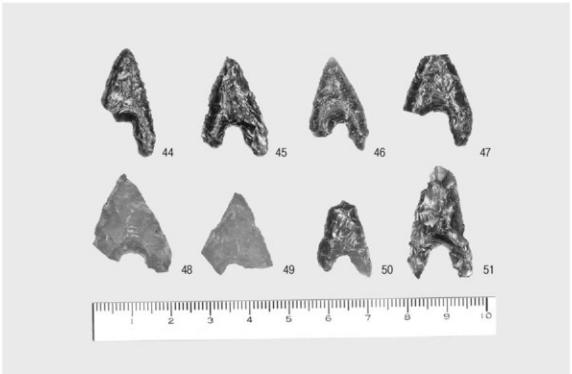


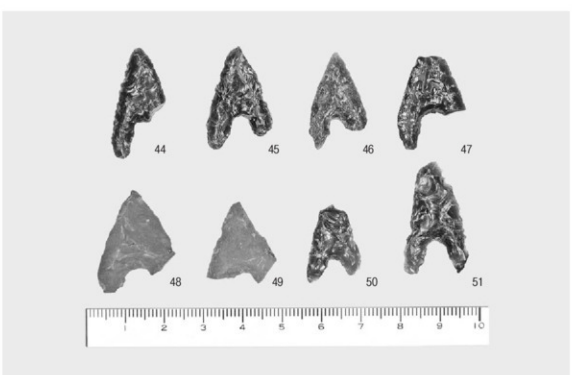
図版13　下羽付遺跡出土遺物⑧



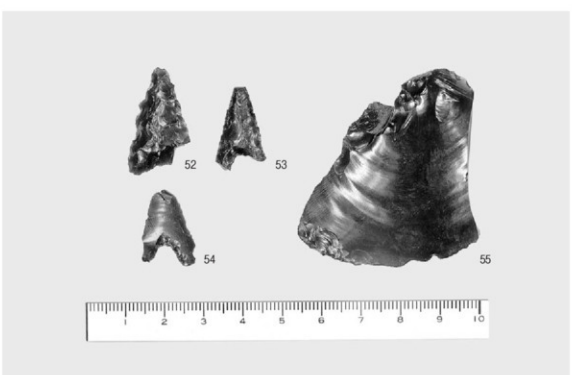


図版14　下羽付遺跡出土遺物⑨





図版15　下羽付遺跡出土遺物⑩



図版16　下羽付遺跡出土遺物⑩

報告書抄録

ふりがな	しもはつきいせき
書名	下羽付遺跡
副書名	主要地方道佐世保日野松浦線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	長崎県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第17集
編著者名	白石渓冴（編著）
編集機関	長崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒811-5322　長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触515番地１　電話0920（45）4080
発行年月日	西暦2016年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
下羽付遺跡	長崎県佐世保市 世知原町矢櫃免	42202	56-72	33°15′21″	129°44′34″	2015．6．29 ～ 2015．8．14	742㎡	主要地方道佐世保日野松浦線道路改良工事

収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下羽付遺跡	遺物包含地	縄文時代		石鏃 異形石器 円形掻器 磨石 土器	

長崎県埋蔵文化財センター調査報告書第17集

下羽付遺跡

2016（平成28）年３月31日

発行　長崎県教育委員会
長崎市江戸町２番13号

印刷　株式会社　昭和堂